

釈迦牟尼仏陀の頭部（木造仏頭（釈迦如来像頭部）） 国宝

この大きな木製漆塗りの頭部は、仏教の創始者である仏陀釈迦牟尼の像である。仏陀は約 2,500 年前に悟りを得て、衆生を救うことを誓った。もともとは金箔が貼られていたこの像は、有名な仏師である運慶（1150～1223 年）によって 1189 年頃につくられた。この頭部は、興福寺の西金堂の本尊であった仏像の一部であり、火事で焼けてしまった 8 世紀の仏像のかわりとしてつくられた。1717 年に西金堂が火災で焼失したとき、大きな作品からもぎ取ることができたものだけが救い出された。同じく興福寺の国宝館に収められている梵天像および帝釈天像は、この頭部がついていた仏像とともに祀られていたものである。

この釈迦牟尼はふくよかな頬と唇をしており、優雅な曲線を描く眉毛と様式的な円錐形の頭髪が頭部につけられている。これは日本語では螺髪と呼ばれ、髪の毛の剃り残しを表し、釈迦牟尼が俗世との関わりを立つために頭髪を剃ったという事実を象徴している。この頭部のもうひとつの特徴は、ウルナ（日本語で白毫）がないという点である。これは額にあるめでたい螺旋または点であり、仏陀が説教を始めるまえにその額から放たれた光線を象徴している。興福寺に伝わる伝承によると、8 世紀の仏像の作者は水晶で白毫を入れようとしていたところ、突然額が開いて、光があふれ出したという。彼は人工的な白毫を入れることをやめた。この頭部をつくった運慶もそれに習ったという。